

フランス語における新語とクラチュロス主義

—かばん語に関する—考察—

中 尾 和 美

0. はじめに

ソシュール以降、言語における記号表現と記号内容の関係は恣意的であるとされてきた。またそれが今日でも言語学の中心的な礎ともなっている。他方、記号表現と記号内容の間になんらかの関係づけを打ち立てようとする試みがある。それは、プラトンの『クラチュロス』以来、依然として多くの学者、作家を惹きつけてやまない挑戦でもあり、また言語使用者が必ずや経験する勘違いや民間語源の原因にもなっている。本稿では、現代フランス語の新語法を概観し、なかでもかばん語に焦点を当てることで、記号表現の中に現れる動機づけと言語使用者の志向を考察することを目的とする。

1. クラチュロス主義

「名前の正しさについて」という副題が示すように、『クラチュロス』では、記号表現と記号内容の間にふさわしい関係が構築されているかを探るための対話が展開される。両者の関係は慣習的で、本質的に定まった名前はないとするヘルゲモノスと、何の根拠もなく出鱈目につけられている名称はなく、それぞれの対象に対して本来本質的に定まっていると考えるクラチュロス、その両者とソクラテスが対話をしながら議論が進むのだが、ソクラテスが記号表現と記号内容の関係づけを行う際、その手法には、2つある。ひとつには、分析的手法であり、記号表現を正当化する別の記号表現を語の中に見いだして説明をする。たとえば、「神々 (theoi)」は、駆け足で走っている天体が神々であると信じていたことから「走る (thein)」という本性にもとづいて「神々 (theoi 走るもの)」と呼ばれ、また海が歩みを妨げ、足 (podes) の枷 (desmos) になったので、足枷である海を支配することから「足枷 (podidesmos)」の意味で海を司る神をポセイドン (Poseidón) と名づけたなどと論じる。もうひとつには、音象徴に訴える手法で、文字や音の中に命名の必然性を見出そうとした。rはあらゆる運動を表現する道具であるので「流れる (rhein)」や「震え、揺れ (tromos)」のような運動を模写するの対して、lは舌が滑って発音されるので、「滑る (olisthanein)」のような語に使われると言う。このような語の動機づけを探る試みは、その後もライブニッツ、ボゼ、ノディエ、マラルメ、レリスなど哲学者、文法学者、文学者らの様々な著作において真剣に取り組まれたことはいまさら言うまでもない¹。

ここでは、ヘルゲモノスとクラチュロスのどちらが正しいのかを論じるつもりはない。われわれが問題にしたいのは、言語使用者が常に持っている分析的手法への志向である。ある記号表現の中に別の記号表現を見つけようとする試みは、クラチュロスやソクラテスのようにことばについて真剣に議論する者でなくとも、ことばを理解する上で言語使用者が日常的に行っていることである。antisarkozysme という語をはじめて耳にしたとき、一般的な知識を持つフランス語話者であるならば、「反対」を意味する接頭

辞anti-、現フランス大統領の名字Sarkozy、「主義」を意味する-(i)smeの3要素に分析することはそれほど困難ではない。新しい語を解釈する際、これまでの言語経験から、それとの類推で意味を読みとろうとすることは至極自然な行為である。換言すると、記号表現には何か記号内容を示唆するような要素があるという予想と期待が言語使用者には常々あるということだ。だから、新しい語であってもネイティブスピーカーであれば、ある程度類推し意味を推し量ることができるという利点がある半面、記号表現には記号内容を示唆する記号が必ずや隠されているという思い込みがすでに発展することもあり、それが民間語源をはじめとするわれわれが日常的に犯す様々な勘違いを招き、はたまたソクラテスが行ったかなり強引な関連づけや、もっと極端な例では、ヘブライ文字のアルファベットの解説から聖書の新たな解釈を求めカバラなどにまでつながっていくのである。

クラチュロス主義が正しいかどうかはともかく、言語使用者が、程度の差はあれ、語の中にその動機づけを見いだしたいと考えていることは事実であり、このような言語使用者の志向がわれわれの興味の対象である。この問題に取り組む前に、実際の記号表現の中に記号内容を示唆する要素をどこまで読みとることができるのか、とりわけ新語を理解するにあたってクラチュロスの手法がどこまで有効なのかを見てみたい。

2. 新語法

2.1. 新しさ

新しい語はどのように新しいのか。語の新しさには、2つのレベルがある。ひとつには、記号表現レベルの新語であり、新語と言うと、これが通常すぐに頭に思い浮かぶ。もうひとつには、記号内容レベルの新語がある。ここでは、両レベルの新しさがどのような手法で付与されるのか、その手法を概観する。

2.2. 記号表現レベルでの新しさ

新しい記号表現が使われる場合、オノマトペ、借用語、商品名や企業名のような固有名詞を除いては、まったく新奇な形式が使用されることは非常に稀である²。新しい記号表現は、既存語や既存要素に何らかの変更が加えられて作られることが多く、往々にして馴染みの記号が新語の中に見てとれる。換言すれば、新しく作られる語の大半は、これまで使用されてきた語を動機づけとして作られていると言えよう。その形成法はというと、仮にXという語をベースに新語ができる場合には、大きく分けて次の3つの手法が考えられる。第一にXに何か別の要素を加えて作る付加方式、第二にXから何かを取り去って作る削除方式、第三にXに付加や削除以外の変更を加える方法である。

2.2.1. 付加方式

付加方式で新語が作られる際、以下の手法が使われる。

・接辞付加

(1) rebonjour ← re- (反復を意味する接頭辞) + bonjour

- (2) sidéen ← sida + -en (「...の人」を示す接尾辞)
- (3) antisarkozysme ← (anti-「反対」を意味するギリシア語) + Sarkozy + isme (「主義、制度」を意味するラテン語接尾辞)
- (4) aquifère ← aquif- (「水」を意味するラテン語 aqua から) + -fère (「含む、運ぶ」を意味するラテン語接尾辞 fer から)
- ・既存語の合成 (複合語)
 - (5) timbre-poste ← timbre + poste
 - (6) chercheur-étudiant ← chercheur + étudiant
 - (7) porte-serviette ← porte(r) + serviette
 - ・既存語の混成 (かばん語)
 - (8) alicament ← aliment + médicament
 - (9) nylon ← vinyl + coton
 - ・異分析
 - (10) lierre ← l'ierre
 - (11) zenfants ← 前の語とのリエゾンによる [z] + enfants
 - ・音節挿入 (le javanais)
 - (12) maventaveur ← menteur
 - ・「肉屋言葉」 (le louchébem)
 - (13) latronpem ← patron

接辞が付加される場合、複数の接辞が既存語に付加されるケース (cf.(3)) もあれば、ラテン語またはギリシア語派生の合成語要素に接辞が付加されて新語を構成すること (cf.(4)) も少なくない。

既存語の合成から成る複合語は、中尾 (2006) など³ で詳しい分析を行ったが、名詞が2つ並置される場合には、後置名詞が前置名詞を限定するタイプ (cf.(5)) と、両者が対等な地位を持つ場合 (cf.(6)) がある。また、動詞的要素が前に、その意味上の目的語が後ろに置かれる複合語 (cf.(7)) も生産的である。

既存語の混成から作られる新語は「かばん語」とも呼ばれるが、2つの単語を融合させることで成り立つ。両者に共通する音があることを利用して、それぞれの一部または一方の名詞の一部と他方の全体を融合させること (cf.(8)) もあれば、音とは無関係に融合させること (cf.(9)) でも作られる。かばん語については、3. で詳しく考察するようにことば遊びの性格が強く、(9)nylon のような登録商標、商品名 (Yvresse⁴)、または専門分野での用語 (sial⁵) などを除けば、(10)alicament のように一般名詞化した語は少ない。

異分析とは、語を誤って分析してしまう現象を指すが、その結果出来た語としては(10)の lierre が有名である。lierre は、本来 ierre という名詞だったが、それに定冠詞がついた形 lierre が今日では名詞として使われるようになった。他方、(11)は、同じ異分析によってできた新語ではあるが、無知のために間違っただけというよりは、故意にあらぬところで分節したといった方が正しいだろう。フランス国歌『ラ・マルセイエーズ』の冒頭 Allons enfants などをはじめ、enfants の前に -s で終わる冠詞や形容詞などが来る場合、通常 z-enfants とリエゾンされるが、それを表記にまで再現した新語である。これはインターネット上のブログや見出し、タイトルなどある種の限られた文脈でのみ使われる形式で⁶、ことば遊びに動機づけられた

異分析である。このような異分析については、かばん語とともに3.で詳しく考察する。

音節挿入は、フランス語で *javanais* と呼ばれる隠語作成法で、語の音節の間に *av* を挿入することで新語が作られる。これもことば遊びの性格が強い。これに類似した新語法に「肉屋ことば」と呼ばれる隠語 *louchébem* がある。*louchébem* では、まず語頭の文字を語末に、次いで語頭に *l* を置き、仕上げに語末に適当な音節を加えることで出来上がる。

2.2.2. 削除方式

削除方式では、以下の手法が見られる。

- ・省略

(14) *prof* ← *professeur*

(15) *blème* ← *problème*

- ・逆派生

(16) *alphabète* ← *analphabète*

- ・異分析

(17) *pas tibulaire* ← *patibulaire*

フランス語では、語を省略する場合、既存語の後半(cf.(14))または前半(cf.(15))を省略するケースはよく見られるが、複合語を構成する語のそれぞれ後半部分のみを省いた短縮語（アメフト（←アメリカンフットボール）、ポテチ（←ポテトチップス））は非常にまれである。省略語が使われる場合、次の例が示すように比較的くだけたコンテクストが多く、ただ単に言語の経済性から長い単語を短くするために省略するわけではない。

(18) *salut!!! il y a un blème et je me perds*

(pourunmondedurable.blogspot.com/.../peut-tre-avez-vous-vu-ce-drle-de.html -)

(19) *Ouh là, tout à fait mon style de petit dej ça!*

(requia.canalblog.com/archives/2010/05/26/18015623.html -)

逆派生とは、派生素素ではない記号をそう思い込んで省いてしまう現象である。(16)は、「*analphabète* (文盲)」が否定的な意味を持っていることから、語頭の *an* を否定接辞と勘違いして、「*alphabète* (識字者)」という新たな語ができた例である。換言すれば、逆派生は、派生語ではない語を派生語と異分析してしまった結果できた語とも言うことができる。このように異分析は新語作成に大きな役割をはたしていることがうかがえる。(17)の *tibulaire*⁷ も異分析の例だが、*patibulaire* を否定の *pas* と *tibulaire* の2語に分析してしまった結果できた新語である。

2.2.3. 付加や削除以外の変更を加える方法

元の語に対して付加もなく、削除もせずに変更をする手法には以下の逆さ語と頭字語がある。

・逆さ語

(20) meuf ← femme

(21) rebeu ← beur ← arabe

・頭字語

(22) PACS ← Pacte Civil de Solidarité

(23) BD ← bande dessinée

逆さ語は、語を2つに切り、それをさかさまにし、さらに語末母音を消去することでできあがる。(21)のように逆さ語をもとに新たな逆さ語が生まれるケースも少なくない。javanais、louchébem同様、逆さ語は隠語としての性格を強く持ち、仲間意識を高める効果も持っている。

頭字語とは、複数の語から成る名称のそれぞれの語の頭文字をとって作る語を指す。フランス語では、全体をひとつの語のように発音する頭字語 (cf.(22)) を *acronyme* と、アルファベットそのままの文字名を羅列して発音する頭字語 (cf.(23)) を *sigle* と呼ぶ。

2.3. 記号内容レベルの新しさ

語の既存の意味が専門化、または反対に一般化することで既存の記号表現に新しい記号内容が与えられる場合がある。たとえば、*arriver*は船が岸 (*rive*) に到着することを意味していたが、それが一般化し、船以外の対象が到着するように意味が変化した。

修辞法によって新しい記号内容をもたらされる新語もある。*souris*が「コンピュータのマウス」を新たに意味するようになったのは、ねずみとの類似性による隠喩であり、*un crème*⁸が「カフェオレ」を意味するのは隣接性に基づく換喩による。また特定の対象を指していた固有名詞が一般的な名詞になる*bic*⁹のような換称や、*escorteuse*が「売春婦」¹⁰を指す緩叙法なども、修辞法による意味の変化である。

記号表現自体は変えずに、それぞれの記号が担う記号内容のみを変えて全体の記号内容を変化させる新語もある。たとえば頭字語をもとにつくったバクロニム¹¹がそれに当たる。頭字語は、語の頭文字しか表に現れないので、元の語の判断がつきにくい。その曖昧さを逆に利用して、元の語を変更して指示対象に新たな価値づけを与えるのである。SonyのコンピュータVaioは、発売当初はVideo Audio Integrated Operationの頭字語であったが、2008年にはVisual Audio Intelligent Organizerの頭字語と再定義された。このVaioの例が示すように、バクロニムは頭字語が当初ベースにしていたXとは異なるX'をもとに指示対象を再定義するので、商品名や企業名などに新たなイメージを吹き込む企業戦略としてしばしば利用される。また時にはXが指示する対象をおもしろおかしく揶揄するために使われることもある。TERは本来Train Express Régionalの頭字語だが、頻繁に遅れるためにToujours En RetardだからTERだと言われたり、TVA (Taxe à la Valeur Ajoutée)はTout Va Augmenterの頭文字だなどと言われるのもバクロニムの例である。

記号表現の分析方法を変えることで、全体の記号内容を変えてしまう新語法もある。これは既に上で見た異分析の手法と密接に絡んでおり、かつ既に2.2.でとりあげた既存語の混成から成るかばん語、さらに地口やもじりといったいわゆることば遊びとも深く関係している。以下、3.でこのような新語法について考察を深める。

3. かばん語

3.1. 異分析

異分析についてもう一度簡単にみておこう。仮にXがxyzという3つの記号から成り立っていると仮定しよう。xyzはxy-zという分析方法が正しいところを、あえてx-yzやx-y-zと分析することで新語X'を作る手法が異分析である。たとえば、hamburgerはhamburgと-erへの分析が正しいのだが、周知のように、hamとburgerに分析され、burgerが一般名詞化した。このように記号表現の分析方法を変更すると新語が生まれるケースは多々あり、またそれと同時にこのような誤った分析は、民間語源を生みだすのに一役買っている。ガロンヌ川の河口付近にあるBordeauxという町の名をみて、bordとeauxという地名だけあると納得したり¹²、キャベツが使われている料理choucroute¹³は、chou（キャベツ）とcrouteからなる語と思いきり、民間語源の場合、指示対象との関連性を語の中に見いだそうと異分析に陥ってしまうケースが多い。これもクラチュロス主義のなせる業だが、このような思い込みと類推による異分析ではなく、語の意味に二重性を持たせるために故意に行われる異分析がある。次の例文をみてみよう。

(24) Les Italiens sont un peuple très ancien, car ils ont Milan. (Cazeneuve (1996))

(25) Au Japon, les femmes ne sont nipponnes ni mauvaises. (Gilder (2009))

上記例は、字面の意味からだけでは文意を読みとることができない。ともに地口やもじりと呼ばれることば遊びが絡んでおり、下線が引かれた語の背後に同音または類音の別の表現を読みとれない限り、全体を理解することができない。換言すれば、(24)ではMilanをmilleとansとに、(25)ではnipponnesをniとbonnesとに異分析することができれば文の意味を把握できるということである。言うまでもなく、この場合の異分析は、語源や動機づけを解明するためのものではなく、それどころか語を文脈に即して都合のいいように分断するだけの一時的な異分析でしかない。しかし見方を変えれば、地口やもじりは、文脈さえ利用すればどんな既存語でも荒唐無稽な構成要素に分解できるということを具体的に示す異分析であるとも言えよう。つまり、ソクラテスが語Xの動機づけを解明しようとして行った記号表現の分析を、あえて別の語X'を作るために行うのが地口やもじりである。他方、既存語を新語に変えることで異分析の可能性を示唆する新語法がある。それが次にみるかばん語である。

3.2. 異分析とかばん語

かばん語の多くは、一言で言うならば、既存語をxとyとに異分析する必然性を綴り字で顕在化させた新語である。例を見てみよう。

(26) Dhommge. Eloge qui vient trop tard. (Finkielkraut (1981))

(27) Logosse. La Raison qui gouverne le monde, tombée en enfance. (*Ibid.*)

(28) Autobiograve. Qui emploie, pour écrire sur soi, un ton digne et solennel. (*Ibid.*)

(29) Quetschup. Sauce anglaise à base de prunes. (Créhange (2004))

- (30) Macdolescence. Jeunesse irrespectueuse de la tradition gastronomique française. (Finkielkraut (1981))

これらは、創作かばん語ばかりを集めた「かばん語集」から抜粋した例である。音的には既存語と同音または類音という特徴を備えているが、綴り字の上からは新語である。しかし、その新語の中に既存語がそのままの綴りか、もしくは少しばかり変形された形で存在するという特徴を持っている。たとえば、(26) dhommageは既存語 dommageと同音であり、かつその中に既存語 hommgeを、(29) quetschupは既存語 ketchupと類音で、かつそこに既存語 quetscheをわずかに短縮した形で見出すことができる。つまり、これらのかばん語は、既存語を異分析した結果を既存語の綴り字を変えて提示しているとも言えよう。(24)では、Milanが同音の mille ansから構成されるということを、Milanの形式を保持したまま文脈から理解させようとした。これが地口である。それに対して、(26)では、dommageにはhommageが関与していることをdhommageという綴り字を変えて提示した。ここまでは地口とほぼ同じ異分析の手法である。しかし、かばん語の場合、異分析にもうひとつ工程を加えることが必要とされる。それは、綴り字を変形させた既存語に新たな意味を付与する作業である。つまり、dhommageの中にhommageを発見させるだけでなく、dommageとhommageの意味を混成させた新たな意味をもつ新語としてdhommageを作るのである。

3.3. かばん語のおもしろさ

かばん語には滑稽なものが少なくない。それには、命名者が積極的に荒唐無稽な意味をかばん語に与えようとしていることが事実としてある。かばん語集を著したFinkielkraut (1981)は、「音的に類似している2語を混成させたら、それでもって言語化しにくい入り混じった感情、ばかげた概念や妄想上の動物を定義する」と言い、Créhange (2004)は、「ある語を別の語と音から関連させてシュールレアリスト的なかばん語を作ったら、それに誰も反論できないような論理性を持った意味を与えよ」とかばん語の作り方を指南している。つまり、かばん語集に記されているかばん語は、音的類似性と突飛な意味づけによって新たな指示対象を作り出すことば遊びであると言うことができる。

言語が有する名詞には限りがある。すべての事象に対してそれを表す名詞が存在していないことはもちろんのこと、また逆に言うと、名詞を与える事象かどうか疑わしい場合もある。たとえば、死後にある人の功績が大きく評価され、生前に認められれば良かったらうにと残念に感じながら功績を讃えることはあっても、それ専用の新しい名詞を作る必要があるかどうかは定かではない。つまり、われわれがよく経験する事象であってもそれが命名するに値する指示対象であるかどうかは、かなりあやしいのである。しかし、それにあえて名称を与えたのが、たとえばdhommageである。その結果はどうだろうか。「こんな語があればいいと思っていた！」という発見の喜びよりも、むしろ何かおかしさの方を強く感じてしまうのではないだろうか。

一般的な事象であってもそれを指す特定の語がないことを利用して、あえてそれに新たな名称を与える遊びがアメリカにはある。そのような新語はスニグレット (sniglet) と呼ばれるが、Pinker (2007)には新聞などに投稿されたスニグレットが紹介されている。スニグレットはかばん語の形態をとることが少なくないが、これらを眺めていると、一種のばかばかしさとおかしさがこみあげてくるのを禁じえない。

- (31) whomnesia (← whom + amnesia. 相手の名前を思い出せない気まずい瞬間) (Pinker (2007))
 (32) conphoniesion (← confusion + phone. 携帯電話が鳴った時、自分の携帯かどうか分からずに生じる一種の混乱) (*Ibid.*)

確かに一般によく経験する事象を言い当てたことばではあるが、それが言語化されて新語として提示されるとなぜかおかしさを感じてしまう。Pinker (2007) は、新語が定着するかどうかは予測不能としながらも、このようなスニグレットは、名称をつけてまで話題にするような事象を指示しておらず、それゆえに命名行為自体がおもしろさをかきたてると指摘している。命名するに値するような対象は何か、新語はいかに定着するかについてはまだ謎が多く残されているが、ことば遊びで作られたかばん語の多くが、あえて新語を要求しないような対象を命名していることは事実である。その証拠に、かばん語が指示する対象が、命名を必要とするような対象になれば、かばん語の面白さは半減する。たとえば、(30)であげた Macdolescence は、Finkielkraut (1981) がことば遊びとして作ったかばん語だが、仮に「ファーストフードばかり食べてフランスの伝統に反した食事をする若者」が何らかのきっかけで話題にされることになれば、音的関連性のおもしろさを残しながらも意味的なおもしろさは排除されるにちがいない。しかし、なぜかばん語が示す音的関連性はおもしろいのだろうか。

Finkielkraut (1981) は、その冒頭で、荒唐無稽なかばん語を作ることこそが喜び (plaisir) であると書いているが、確にかばん語の多くは楽しんで行うことば遊びとして作られている。そもそもかばん語¹⁴とは、ルイス・キャロルが『鏡の国の中的のアリス』の中で命名した名称だが、キャロルをはじめ、ジョイス、クノーなど多くの作家が好んで創造した新語法のひとつである。また、既にみたように、多くの創作かばん語がおもしろおかしく新たな対象を作り上げることに貢献している。かばん語は確におもしろい。そのおもしろさの一端は指示対象にあることは既に指摘したが、なぜかばん語が示す音的関連性はおもしろいのだろうか。それを考える前に次のかばん語をみてみよう。

- (33) Pantaculotte (Congo-Kinshasa). Le pantaculotte est, en effet, plus court qu'un pantalon, mais plus long qu'un short. (Treps (2009))

pantaculotte は、コンゴ民主共和国で使われているかばん語だが、音的関連性のない 2 語を融合させた結果できている。この場合、2 つの語が融合されてはいるが、透明性があり、どちらかというときmbre-poste のような複合語に近い。このかばん語ははたしておもしろいだろうか。また次のかばん語はどうだろうか。

- (34) Le terme *courriel* a été adopté et publié par la commission générale de terminologie et de néologie au *Journal officiel* du 20 juin 2003. (<http://www.culture.gouv.fr/culture/dgllf/terminologie/courriel.htm>)

courriel は英語からの借用語 e-mail を排斥するために courrier と électronique から作られたケベック生まれのかばん語だが、courrier の形をほぼ踏襲している。しかしこれが両者からなるかばん語であることがどれだけ一般に認知されているだろうか。また既に完全に一般名詞化した modem¹⁵ や gélule¹⁶ のよう

なかばん語はどうだろうか。Macadolescenceと比べて語がかもしだすおもしろさは大きいだろうか、それとも小さいだろうか。おもしろいかどうかというよりも、むしろこれらは、pantaculotteとは逆に2つの語の混成が進み過ぎて、かばん語という印象をもはや使用者に与えないのではないだろうか。どうやらかばん語の形式のおもしろさは、構成要素である2つの語に音的関連性があるのみならず、それが適度に見え隠れしながらも判別できることになるようである。が、それはなぜだろうか。

4. 遊びとクラチュロス主義

かばん語のおもしろさを考えるには、遊びについても見ておく必要があるだろう。

遊びについて社会との関わりから考察をしたCaillois (1967)は、遊びを、1. 自由な活動、2. あらかじめ定められた時空間に制限された活動、3. 未確定な活動、4. 財や富を生み出さない活動、5. 規則のある活動、6. 虚構の活動であると定義したが、これらの特徴は、楽しんでかばん語を作るものにとって多くの点ではまる。語を自由に選ぶことができ、妄想の中で生まれた対象を指示させる。これはかばん語が指示する荒唐無稽な対象に関連している。また、既存語という形式的な制限で音的類似性の規則に則って作られる。かばん語がおもしろい遊びになるのは、まさにこの既存語の制限の中での音的類似性ゆえなのであって単なる音的類似性ではない。そう考えると、pantaculotteがおもしろいとは言い難いかばん語だったことがうなずける。pantaculotteには、制限が乏しすぎたのである。ただ2つの語を並置しているにすぎず、それ以外の縛りがなかった。他方d'hommageがおもしろく感じられたのは、dommageという語の中に同音の語を配置したからであり、dommageが制限となって、さらにそこに同音性という規則から別の語を選ぶことを自ら強いたところに遊びとして成立する要因があったのである。

ことば遊びと密接に関連する新語法の多くは、多かれ少なかれCailloisが指摘した性格に根ざしている。それは一言で言えば、「制限と規則の中で未決定なものを自由に操る」ということになる。既存語の型に様々な規則をもとに別の語を当てはめるのが、新語法の遊びである。louchébemとjavanaisは、一定の規則に基づいて既存語に音節を付加することで作られ、逆さ言葉は、一定の規則に従って語を逆さにすることで得られた。また、頭字語は、未決定な部分を多分に残していることから、ことば遊びの宝庫となっている。既存頭字語の指示対象に対して同じ頭文字を使ったバクロニムが作られたことは既に指摘したとおりだが、それとはまた別の頭字語を使った新語法もある。次の例を見てみよう。

(35) Sous prétexte qu'on est en Afrique, les PME (partisans du moindre effort) croient pouvoir tout ramener à la religion. (<http://www.lefaso.net/spip.php?article36827>)

Petites et Moyennes Entreprises (中小企業)の頭文字をとったPMEという一般に流布した頭字語があるが、この場合のPMEは、括弧の中に説明があるようにPartisans du Moindre Effortをベースとした新たな頭字語である。この新たなPMEは、頻度はそれほど高くはないもののインターネットなどでも使用されており、またセネガルではあまり成績のよくない学生を指す学生言葉として使われている。本来Partisans du Moindre Effortは、「怠惰なもの」を指す比喩的な成句表現であるが、だからといって頭字語に縮めなければならないほど特定の対象やある種の定まった集団を指示するとは考えにくい。しかしながら、PS (Parti SociaListe) やPC (Parti Communiste) のような党派と似たような表現であること、

また Petites et Moyennes Entreprises (中小企業) の頭字語として PME がすでに一般化しているという事実が、Partisans du Moindre Effort の頭字語化を促したと推察される。よく知られた頭字語の存在が別の対象を指す同じ頭字語の成立をおもしろくするのである。既存表現の型が新語法を遊びの場に変えるのである。

換言すれば、ことば遊びの性格を多分に持った新語法もまた、形式と意味の間に動機づけを求めたクラチュロス主義のひとつの形とは言えないだろうか。ソクラテスは命名対象の本質をあらわすような「正しい名前」を発見しようと既存語の中に形式を正当化する動機づけを求めた。ライプニッツ¹⁷は、ことばの形式と意味の間には動機づけがあることを認めつつも、言語は恣意的であるべきだと説いた。ドゥ・ブロス¹⁸やジェブラン¹⁹は指示対象を正確に描く (peindre) ことこそがことばの真髄と考え、音に語の動機づけを見出そうと文字の調音法と意味とを関連付けた。同時代のコンディヤック²⁰やバトゥ²¹は文における語順が思考の流れを忠実に写していると考えた。このように言語の様々な記号表現の中に動機づけを見いだそうとする試みが、『クラチュロス』を筆頭にその後も続いているが、まさに Genette (1976) が言うようにクラチュロス主義は「おもしろく、楽しい、しかし時には悩ましいまでに魅力的な数々の名作を世に送り出している」のである。ブルーストが『失われた時を求めて』の中で、その音綴りからパルムについて「小さくまとまった、滑らかな、薄紫色の、心地よいもの²²」と記したことも、jourの方が暗く nuitの方が明るいと言語表現と記号内容の乖離を嘆いたあまりにも有名なマラルメの嘆きも、クラチュロス主義と無縁ではない。そして、ことば遊びもクラチュロス主義と密接に関係している。興味深いことに、Caillois (1967) が遊びを4つのカテゴリー²³に分類しているが、そのひとつがミミクリ (Mimicry) である。ミミクリとは別の人格になるような遊びで、こどもの真似ごっこのようなものを指すが、Genette (1976) がこのクラチュロス主義の歴史を奇しくも *Mimologiques* というタイトルのもとに扱ったことも偶然ではないだろう。クラチュロス主義はまさに言語のミミクリに対する人間の志向であり、記号表現が記号内容や指示対象さらに人間の思考を忠実に真似してそれを顕在化しているということは、言語による現実のミミクリであり、まさに遊びにも通じるものなのである。

5. 結び

記号表現と記号内容の関係は恣意的であるかもしれない。しかし、これまで多くの先人達がクラチュロス主義に惹かれてきたように、クラチュロス主義は依然として言語使用者を魅惑している。ことばに対して動機づけをたえ一時の遊び心からでも自ら与えたいという欲求がわれわれにあるのも、クラチュロス主義が常に言語使用者を惹きつけてやまないからである。

[注]

- 1 Cf. Genette (1976).
- 2 Cf. Sablayrolles (2000).
- 3 Cf. 川口・中尾 (2007)、Nakao (2003)、中尾 (2005).
- 4 Yves Saint-Laurent の香水の名前。ivresse と Yves から成り立つ。
- 5 silicium と aluminium から成り立つ。
- 6 インターネットで採取した zenfants の例である。

Sites pour les zenfants en Bretagne www.breizhoo.fr/web/annuaire/?rub=1032

- 7 コメディアン Coluche がスケッチの中で、“pas tubulaire, mais presque” という形で初めて使ったとされている。現在でも pas tubulaire の形で「よくない」という意味で使われているのを目にする。
- 8 この場合、crème が男性名詞になることに注意したい。
- 9 登録商標なので、本来大文字で書き始めるべきだが、小文字で書かれる例はすこぶる多い。
- 10 Cf. Sablayrolles (2000).
- 11 英語 backronym からの借用で、フランス語では rétro-acronyme と呼ばれる。
- 12 恥ずかしながら筆者自身の民間語源の例である。
- 13 アルザス語の sùrkrût を語源としている。
- 14 portmanteau word、フランス語の mot-valise はその翻訳。
- 15 modulateur と démodulateur から成る かばん語。
- 16 gélatine と capsule から成る かばん語。
- 17 Leibniz, G. W. *Nouveaux Essais* (1765), cité dans Genette (1976).
- 18 De Brosses (1765) *Le Traité de la Formation mécanique des langues*, cité dans Genette (1976).
- 19 Gèbelin, A. C. (1775) *L'Origine du langage et de l'écriture*, cité dans Genette (1976).
- 20 Condillac (1746) *Essai sur l'origine des connaissances humaines*, cité dans Genette (1976).
- 21 Batteux, C. (1748) *Cours de belles-lettres*, cité dans Genette (1976).
- 22 Le nom de Parme, une des villes où je désirais le plus aller, depuis que j'avais lu *la Chartreuse*, m'apparaissant compact, lisse, mauve et doux [...] (Proust, M. *A la recherche du temps perdu* I, 1954, Gallimard, Bibliothèque de la pléiade, p.388).
- 23 Caillois (1967) は、遊びを競争 (アゴン)、運 (アレア)、模擬 (ミミクリ)、眩暈 (イリンクス) の 4 つに分類した。

【参考文献】

- Argand, R. (2006) *Le plaisir des mots*, Les Editions de l'homme.
- Caillois, R. (1967) *Les jeux et les hommes, le masque et le vertige*, édition revue et auguementée, Gallimard, 多田道太郎・塚崎幹夫 (訳) 『遊びと人間』 (1990), 講談社学術文庫.
- Cazeneuve, J. (1996) *Du calembour au mot d'esprit*, Editions du Rocher.
- Clas, A. (1987) Une matrice terminologique universelle : la brachygraphie gigogne, *Meta XXXII*, 3, 347-355.
- Créhange, A. (2004) *Le pornithorynque est un salopare dictionnaire de mots-valises*, Mille et Une Nuits.
- Finkielkraut, A. (1981) *Petit dictionnaire illustré*, Seuil.
- Genette, G. (1976) *Mimologiques*, Seuil.
- Gilder, A. (2009) *Anthologie des jeux avec les mots*, le Cherche midi.
- Henriot J. (1973) *Le Jeu*, P.U.F., 佐藤信夫 (訳) 『遊び』 (1974), 白水社.
- Huizinga, J. (1938) *Homo Ludens*. 高橋英夫 (訳) 『ホモ・ルーデンス』 (1973), 中公文庫.
- 川口順二・中尾和美 (2007) 「感情の言語表現」『21世紀COEプログラム 心の解明に向けての統合的方

- 法論構築 平成18年度成果報告書』(慶應義塾大学21世紀COE心の統合的研究センター) pp.171-177.
- 窪園晴夫 (2002) 『新語はこうして作られる』 岩波書店.
- Le Grand Robert de la langue française* (2001), Dictionnaires le Robert.
- NAKAO, K. (2003) «Une réflexion sur la construction «nom+nom» Pourquoi dit-on *le serpent boa*, mais pas *le chien caniche?*», *Etudes de langue et littérature françaises* no. 82 (日本フランス語フランス文学会) pp. 220-230.
- 中尾和美 (2005) 「Une pizza jambon-tomate-fromage style New-Yorkのような構造について」, 『フランス語を探るーフランス語学の諸問題 III』 三修社.
- 中尾和美 (2006) 「名詞を直接修飾する名詞の形容詞化」『ふらんぼー』 31号 (東京外国語大学フランス語研究室), pp.19-33.
- 中尾和美 (2007) 「ことば遊びにおける意味の二重性ー諷刺新聞におけることば遊びの一考察ー」『ふらんぼー』 32・33合併号 (東京外国語大学フランス語研究室), pp.50-65.
- 中尾和美 (2010) 「遊びと言葉遊び 一言葉遊びから商品名・企業名へー」, 『フランス学研究第44号別冊「ことばを(で)遊ぶ』 (日本フランス語学会), pp.103-116.
- Pinker, S. (2007) *The Stuff of thoughts*, Penguin (Non-Classics), 幾島幸子、桜内篤子 (訳) 『思考する言語』 (2009), 日本放送協会.
- プラトン『プラトン全集 2 クラチュロス テアイトス』 水地宗明 田中美知太郎 (訳) (1974), 岩波書店.
- Pruvost, J. & J.-F. Sablayrolles (2003) *Les néologismes*, Que-sais je ?, P.U.F..
- Sablayrolles, J.-F. (2000) *La néologie en français contemporain*, Honoré Champion.
- Treps, M. (2009) *Lâche pas la patate! Mots et expressions francophones*, Le Sorbier.